

おうむの「オハヨウ」といぬの「ワンワン」

朝、おうむを見たら、「オハヨウ」といいました。いぬは、「ワンワン」といって尾を振って近よりました。

さて、あなたは、このどちらに、朝のあいさつを感じますか。おうむの「オハヨウ」にですか。それとも、いぬの「ワンワン」にですか。

おうむの「オハヨウ」に、朝のあいさつを感じる人もあるでしょう。それは、「オハヨウ」というおうむの声から、聞く人が、人間どうしのあいさつを感じ取るためです。しかし、その声を出したおうむ自身は、その声に、なんの意味も感情も託しておりません。耳に聞いたかぎりでは、わたしたちのかわすあいさつと同じですが、中身はまったくちがっています。

これにひきかえて、わたしたちは、ふつう、いぬの「ワンワン」に、ずっとあいさつを感じずるはずです。いぬとわたしたちとの間には、「ワンワン」という声をなかだちにして、りっぱに感情の交流が行われるからです。

一年生が論語を読む

「とも、えんぼうよりきたる。またたのしからずや」

この文を一年生に読ませたら、おそらく、わたしたちが読むのと同じように、りっぱに声に出して読むでしょう。

ところで、あなたは、これを、「文を読んだ」といいますか。わたしは、そうはいりません。なぜかといいますと、それはおうむの、「オハヨウ」と同じように、ことばの働きがないからです。これに反して……、

「友、遠方より来る。また楽しからずや」

この文だと、石井学級の一年生は、「トモ、エンハウヨリクル。マタタノシカラズヤ」と、読むでしょう。「遠方」ということばは習いませぬから、正しい読み方はできません。また、「来る」も「きたる」とは読めませぬ。しかし、「友だちが、遠くの方から来る」という前半の文章の意味は、まちがいなく読み取ることができるのです。「エンハウ」「クル」……読み方こそまちがっていますが、意味だけは正しく読み取っているのです。

前者が、おうむの「オハヨウ」なら、後者は、いぬの「ワンワン」にあたります。わたしは後者に価値を認めます。ことばが生きて、りっぱにその役目を果たしているからです。